

危機 / KIKI / KRISE / CRISIS

秋冬のコレクション 'Kiki'

は、ラクダ(過酷な状態を生き抜く動物)などの強いシンボルと材料を使用して、危機が含意できる複数の意味から導き出したものです。

危機は個人的であるか社会単位に起こる事象かもしれません。それは、人生における外傷性のストレスが多く見られる変化、政治的かつ社会的であり、経済の軍事における不安定で危険な状況、大規模な環境問題、差し迫っている突然の変化にかかわる1つであるかもしれません。それらは緩く、試験的時間を意味するか緊急事態です。危機の語源は古代のギリシア語のκρίσις - krisisから来ていて、分離、区別の力、決定、選択、選挙、判断、論争の意味合いがある。(http://en.wikipedia.org)

「危機」という言葉は二つの漢字から成り立っている。一つは危険を表し、もう一つは機会を表す。

ジョン・F・ケネディ (1917-1963)

危機とは産出力がある状態のことだ。周期的な秩序だった現象の中から不意に発生する無秩序な現象の後味を取り除かなければならない。

マックス・フリッシュ (1911-1991)

だからこの医学的な意味で「危機」は回復への始まりの決定的な転機である。

クラウス・バルテルス

どんな馬鹿も危機に直面することができる。それは、日々生きてく上であなたに疲れを生み出すものだ。

アントン・チャーホフ (1860-1904)

「危機」

ドイツ語社会では「財政危機」を2008年の言葉に選んだ。この語は同時に「不動産危機」、「信用危機」、「流動性危機」、「経済危機」の意味もこめているという。危機につぐ危機である。だがこの言葉を語義通りに取ってみれば2008年には危機はまったく無かったし、今もなお見えてこない。というのも「危機」とは元来「大問題」、我々が乗り越えたり、取り除けたりしなくてはならない、我々の前に「投げ込まれた」大岩ではない。ましてやすべての掛けがねが壊れて氷塊や数十億円の金が永久に見ることもなく川を流れ下ってしまうような「壊滅的事態」でもない。そもそも「危機」とは決断の瞬間、川を下るか、遡るかの転回点なのだ。ドイツ語になったラテン語、ギリシャ語辞典（フォルク ウント ヴィッセン 出版社、ベルリン 1988年）では「危機」の項目に次のような説明がある。1) 決定的な時点、転機。2) 資本主義の内的矛盾の発展（内的矛盾がますます先鋭化すること）とその周期的な経済危機。3) 伝染病で突然、熱が下がること。その後回復に向かう。だからこの医学的な意味で：「危機」は回復への始まりの決定的な転機である。クラウス バルテルス

Klaus Bartels

再配分政策

この20年間の社会政策システムの変化、政治、社会、経済の幅広い分野のネオリベリズム化とその社会に及ぼす影響と結果はいたるところで明らかであるが、でも隠されている部分もある。富の増大の一方で増大する貧困、共助（連帯）社会の衰退、生活条件の困難、中流階層の貧困化、社会的弱者階層のドラマティックな生活危機、深刻な収入格差を、政権党とその経済エキスパートたちは国家財政の健全化のための国家的な節約方針に不可避な措置であるとかまた経済成長のために必要な手段であるとか言い立てている。

その間に、金融危機が節約というドグマを一時棚上げにさせて、銀行救済法案と景気対策のために金に流動性を与えることになった。すべての財政政策は実質経済への負の影響を防ぎ、できるだけ多くの働き口を救うために必要なのだと宣伝されている。だがこれは相変わらずネオリベリズムのモットーである「大きな民営化、小さな政府」という意味で、自己目的のために国家を弱体化するあたらしいやり口ではないのか。なぜなら銀行救済法案で出ることになった金は実質経済には届かないし、社会福祉分野にももたらされない。いわゆる経済活性化のための措置で働き口が本当に救われるのかは今後の様子を見

なくては分からない。

資本の再配分—大企業や株主に有利な—は社会的に不平等な社会を作り続けるだろう。

再配分はメインストリームポリシーによって違った風に正当化され、意味づけがなされるだろう。

ネオリベラリズムの要請という名のもとで社会福祉国家の任務と仕事内容はだんだんと縮小される。社会（福祉）的なものという概念の拡散はネオリベラルな行動の構造的な必然性と構造的な経済的解放幻想が引き起こしたものであり、社会福祉国家の解体を早めることに成功した。その結果が脱政治化、脱共助化であり、シンボリックにも実際的にも国民の権力の喪失と貧困化および前途への希望のなさである。社会福祉国家の解体は宣言されていた目標であり、不平等な社会的日常を確定するものである。大企業には税金の軽減、株利益を守るための解雇、労働時間が増えつづけるのに据え置かれる安い賃金などが不平等と貧困を生み出した。国家と中流階層が貧しくなり、権力関係は資本家-寡頭政治の方向にシフトした。社会福祉国家の解体は右翼-保守層の要請であり、彼らはマーケティング戦略とメディアの支持を得て自分たちの政治的かつ反社会（福祉）的プログラムをメインストリームにすることに成功する。

「さまざまな経済、社会、経済政策上の問題の原因はますます間違っている配分状況にある：収入の間違った配分によって社会全体の発展は停滞し、貧困が増大し、両極化し、金融市場の投機の過熱化がおこる。労働の誤った配分は長期にわたる生産性向上とそれに伴う労働量の減少という正の効果が、全員雇用経済でのより短い労働時間ということの実現を妨げる。その代わりに生産性の向上は大量失業と長時間の劣悪労働という結果をもたらす。権力と政策に及ぼす人々の影響力の誤った配分は結局、まず金持ちに奉仕し、大多数の人々がもつ欲求や問題とはかけ離れた、民主社会の基礎を危うくする経済政策になった。」〈注〉

社会体制内部のこのような変化の数々はなにを引き起こすであろうか。もっとも立場の弱いのは当然、弱者、若者たち、移住民、ひとりで子供を育てる女性たち、年金生活者と失業者たちである。彼らは金を払えといわれるか、社会給付金を減らされるかなのだ。前途への不安、過重負担、貧困と差別はますます拡大し、もっと公平な社会的配分への要求にいたる。新しい配分構造のきっかけになりそうな労働時間の短縮を言う者が居ない。これが大量失業を防ぐ重要なファクターだろうと思われるのである。社会政策の欠如への解答として、資本主義的な市場に対するオータナティブな可能性として次のようなモデルが考えられる、たとえば土地による収入、自己組織の協同組合活動、または並行市場である。これらが配分システムの構造を新しく作りかえるのだ。

ネオリベラルな政策の結果である貧困、教育の貧弱、若者の前途の見込みのなさなどは社

会的日常の姿である。並行市場、基本賃金または自己組織の協同組合活動は社会的な対抗策となるものであり社会（福祉）的なものについての新たな問いかけでもある。共助、共有地そして社会（福祉）的な行動という概念は今日の社会のコンテキストの中でどのような位置を示しているのだろうか。

Sabine Winkler

ラクダ / KAMEL / CAMEL / AL GAMAL

ラクダ - 砂漠の揺れ動く舟または砂漠の舟

ラクダはいわゆる側対歩で移動する。これは旧世界のラクダにも新世界のラクダにも見られる歩き方である。側対歩とは体の片側の二本の足を同時に動かす歩き方である。

英語ではこの歩き方をunilateral gait(片側歩行)という。

この歩き方だと横軸が不安定になるのでラクダは揺れたり、傾いたりする。だからラクダは「砂漠の舟」と呼ばれるのだ。ラクダに乗る者はいくつかの報告によればこれで船酔いをすることがあるという。

ラクダ - 驚異的に食物と餌に強い

ラクダはどんな植物でも食うし何を与えても食う。毒性のある植物とか塩を沢山含んだ植物でも平気である。ラクダの瘤には脂肪が蓄えられることもできる、いわゆる「静かなストック」である。

ラクダ - 驚異的に砂に強い

ラクダは砂嵐に耐える。長い眉毛と鼻孔と幅広い足の裏が役に立つのだ。蹄は互いにクッションのような皮でつながっている。

ラクダ - 驚異的に暑さに強い

ラクダは摂氏40-42度にならないと汗をかかない。寒い夜中の体温は34度である。

ラクダは体液の3/1を失っても死なない（人間は10%を失うと死ぬ）。瘤は脂肪を蓄える、しかも脂肪は熱を伝えにくいのである。瘤はまた日光からの保護の役割もする。

ラクダ - 驚異的に渴きに強い

ラクダは17日も飲まずにいられるし、120リットルの水を一度に飲むこともできる（人間なら水の飲みすぎで死ぬところである）

ラクダ - 驚異的に危機に強い動物